

奉仕とサービス

横浜港北 桑原 薫

私たちが日ごろ、奉仕の意味で使っている「サービス」は、実は和製英語なのです。サービス品 (Bargain goods) やサービス価格 (special price) などのサービスが、service とは無関係なことから、奉仕と service が別のものだとわかります。事実、辞書にも奉仕は利害を離れて他のために尽くすこと、service は務めとして誰かのために何かをすること、と記されています。中国でも奉仕を利他主義、service を服務と訳しています。

英和辞典において service が奉仕と訳されている理由は、どちらにも「仕えること」という意味があったからなのです。ところが、徳川幕府によって奉仕が「見返りを求めずに尽くすこと」という意味に変えられたのに対し、service は産業革命によって activity (活動) や work (仕事・事業) に近づいたのです。

実際に「奉仕活動」の英訳は、voluntary service や voluntary activity ではなく service が「活動」の英訳だと分かります。また和英

辞典では「社会奉仕」が social service や social work と訳されていますから、service の work が類義語だと分かります。しかも、これらはどちらも英英辞典では「社会事業」として説明されているのです。英語の service には「利益を得ること」という意味があるのです。

つまり、奉仕の理念が「ギブアンドギブ」なら、service の理念は「ギブアンドテイク」なのです。従って事業主が奉仕活動をする場合、二つの理念を使い分けることとなります。なぜなら、「奉仕の理念」で事業活動はできませんし、「service の理念」では奉仕活動ができないからです。

ところがロータリーは、どちらの活動の basis (基本理念) としても成り立つ理念を発見したのです。この発見によって、ロータリアンは double standard (二枚の舌) ではなく、integrity (一つの心) で生きていくことができようになったのです。

そしてこの理念こそが、われわれの謳^{うた}う奉仕の理想 (The Ideal of Service) という理念なのです。the ideal of は「〜の鑑^{かがみ}」という意味の慣用句ですから、この理念は、「理想的なギブアンドテイク」だと考えることができます。

このサービスを society に対して行うのが「職業奉仕」、community に対して行うのが「社会奉仕」ですが、「ロータリーの目的」の邦訳では、どちらも「社会」と訳されているため、誤解が生じているわけです。ロータリーが生まれた頃、society は「利害関係のある仲間の集まり」であり、community は「地域を共にする仲間の集まり」という意味だったのです。